

PICK UP



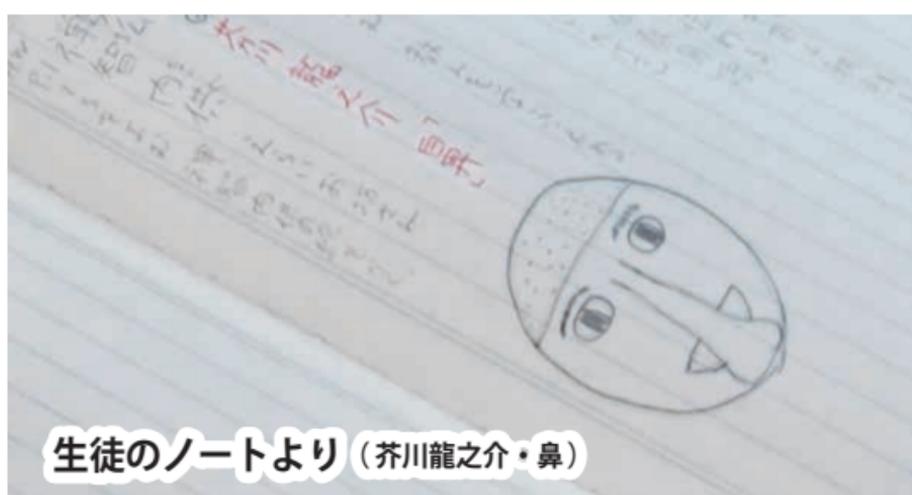
クセジユ 中学部の国語

国語教科主任 濱中志門

● クセジユの国語授業が目指すのは
「組み合わせ遊び」

クセジユ国語の授業とは、学校とも一般的な学習塾とも違うものだといえるでしょう。名前をつけるのであれば、これは「読解・論理・教養・表現を融合させた総合講座」なのです。

まずクセジユの国語では題材にこだわりません。選ぶのは大人が読んだとしても十分に面白いと思えるような、中学生には比較的レベルの高い文章です。例えば人間の矛盾した心理を扱った芥川龍之介の短編『鼻』、全体主義の問題



生徒のノートより (芥川龍之介・鼻)

点を物語形式で描く『動物農場』といった小説、さらには日本の神話。評論文に目を向ければ、住居から日本文化を考察するエッセイ、言語や遺伝子、文化人類学にまつわるものまで、テーマも様々です。こうした文章はいたずらに難しいのではな

く、しっかりと読み解けば、時代や地域を越えた普遍的なテーマを学び取ることができるとです。クセジユではこうした文章を厳選し、ひとつの文章を1ヶ月かけてじっくりと読み込んでいきます。

その際に手がかりになるのが、クセジユオリジナルの読解問題です。基本的には全て記述式で、「筆者はここで何を主張しようとしているのか」といった深いレベルの理解をうながす問題になっています。このときに大切なのが、書かれていることを客観的に読み解くこと。そのためにクセジユでは文章を読む技術をオリジナルの

マニュアルにまとめ、これを使って文章を要約し、問いに答え、さらに論の構成を図に描いたりしながら文章を理解しています。

こうしてそれぞれの文章を理解しようとする、必然その文章や筆者の背景を知ることにも必要になります。例えばヨーロッパの小説を本当に理解するためには、キリスト教などの文化的背景と、市民革命や産業革命といった歴史的背景の知識が必要になります。そうした生徒にとっての未知の世界を解説し、なおかつ生徒が興味を持てるような形で紹介する導き「ナビゲート」もクセジユ講師の役割のひとつです。



授業風景

クセジユでは長年、「知識を知性に」という言葉のスローガンにしてきました。国語において

も、文章から得られる知識を知っただけではまだ終わりではありません。「筆者の主張を身近な世界において考えると何がわかるのか」「筆者の主張は本当に正しいのか」といった、そこから一歩進んだ批判的な問いが生まれてくるからです。クセジユオリジナルの読解問題のなかには「筆者の主張に対する自分の意見を説明しなさい」といった問題もあります。

すると生徒たちからはさまざま意見が飛び出します。それらをまとめながら、「なぜそう

考えるのか」を質問し、考え、講師と生徒の対話を重ねながら進んでいくのです。

こうした問いを、私たちは「答えがひとつに定まらない問い」と呼んでいます。考えさせられる問いに数多く触れていくと、自然と幅広い知識とともに自分たちとは異なる立場や考え方への理解が深まっていきます。物理学者アインシュタインは新しいアイデアを創り出すことを「組み合わせ遊び」と表現していました。異なる世界に対しての幅広い視野、そしてそれらを組み合わせる独自の着眼点や発想力、こうした新しい価値を創造するクリエイティビティこそが21世

紀に求められる能力であり、またクセジユの国語が目指す本当の「国語力」なのです。

では実際に教室で展開される授業はどのようなものなのか、少し様子をお見せしましょう。

● 「正しいとはなにか」をめぐる授業

2月 中学1年生授業 題材 マイケル・サンデル著『ハーバード白熱教室講義録』

この日の授業は、一冊の本を手渡されるところから始まりました。タイトルは『ハーバード

白熱教室講義録』。数年前に日本でも話題となった、ハーバード大学の哲学科教授マイケル・サンデル氏の授業を記録したものです。クセジユでは一冊の本をテキストとして配布することが少なくありません。いってみれば学年が進むにつれて本棚に本が増えていく、というイメージなのです。

「君は路面電車の運転手で、行く手に5人の労働者がいることに気がつく。電車を止めようとするが、ブレーキが利かない。このままでは5人の命を奪ってしまう。しかし、そのとき脇に逸れる待避線があることに気づく。そちらに進めば5人の命を救うことができるが、そこにも1人の労働者がいる。そのまま進むか、ハンドルを切って待避線に進むか、正しい行いはどちらだろうか」

「ここで私たちは一度本を閉じ、この問題について考えてみることにしました。正しい行いはどちらか、自分ならどうするだろうか。多数決をとると、生徒たちの多くは「ハンドルを切る」を選びました。

ではここで、問題の状況を色々と変えてみましょう。5人の労働者は高齢者だが、待避線の1人はまだ若い。あるいは、5人には子供がいるが、1人の方は独身である。または、5人の労働者は実は逃走中の悪人である。または、待避線ににいるのは視察中のアメリカ大統領である……。こうして質問を重ねていくと、生徒の選択もゆらぎ、自信がなくなっていくきます。実はサンデル教授の面白いところは、このように問題の

状況を変えていくところにあります。それでも自分は同じ選択をするのか、それを考えていくうちに「自分はどのように正しさを判断しているのか」という根本的な問題が表れてくるというわけです。

ではここで、生徒たちの意見を見てみましょう。

生徒A:もし待避線にいるのがアメリカ大統領でも、運転手は待避線に進むべき。なぜなら、より多くの人の安全を守るのが鉄道会社の役割だから。ここで大統領を選んだら、今後鉄道を使う人は不安になる。



生徒B:自分だったらハンドルを切らない。5人いる方が、誰かが電車に気がつく可能性が高いので、生き残る可能性も高くなると思うから。



生徒C:事故の可能性はいつもあるのだから、判断の責任を運転手に求めるのはおかしい。こういうときに何を優先すべきか、会社が先に決めておくべきだと思う。



さて、なかでもユニークなものを抜き出してみましたが、「正しいか」は置いておいても、これらはどれも鋭い意見といえます。まず生徒Aの意見は、単に多数派を優先すべきというものではなく、「判断する人の役割によって正しい選択は異なる」という意見です。例えば消防隊員ならば、ときに自分たちの命を危険にさらしても救助することが求められるでしょう。さらに、その選択が社会に与える影響まで考慮しているところも、広い視野を持って考えているといえます。生徒Bの意見はかなり冷静な想像力を持っています。問題の状況として説明されて

いないところまで考えたこの意見は、生徒たちからも驚きとともに支持を集めました。確かに、単純な二択にしばられずに考える想像力もまた、問題を解決するうえでは必要になるものといえるでしょう。**生徒C**の意見はかなり斬新です。そして、実はこの意見こそが最も注目されるべきかもしれません。この電車の問題は別名「トロツク問題」と呼ばれ、かなり古くからある哲学の問題です。それが今、人工知能を搭載した自律走行車の出現により再びホットな問題として議論されているのです。実際にマサチューセッツ工科大学では、事故に直面した人

工知能にどのような選択をさせるべきなのかが研究されています。近年多くの新技術が登場していますが、新しい技術を導入する際には「それをどのように使うべきか」というところまで考える必要があります。「トロツク問題」は一見するとありえない、机上の空論のようにも思えます。しかし実際にはこの「答えがひとつに定まらない問題」をどう考えるかが、現実の社会を作りあげているのです。

●豊かな「脱線」にこそ

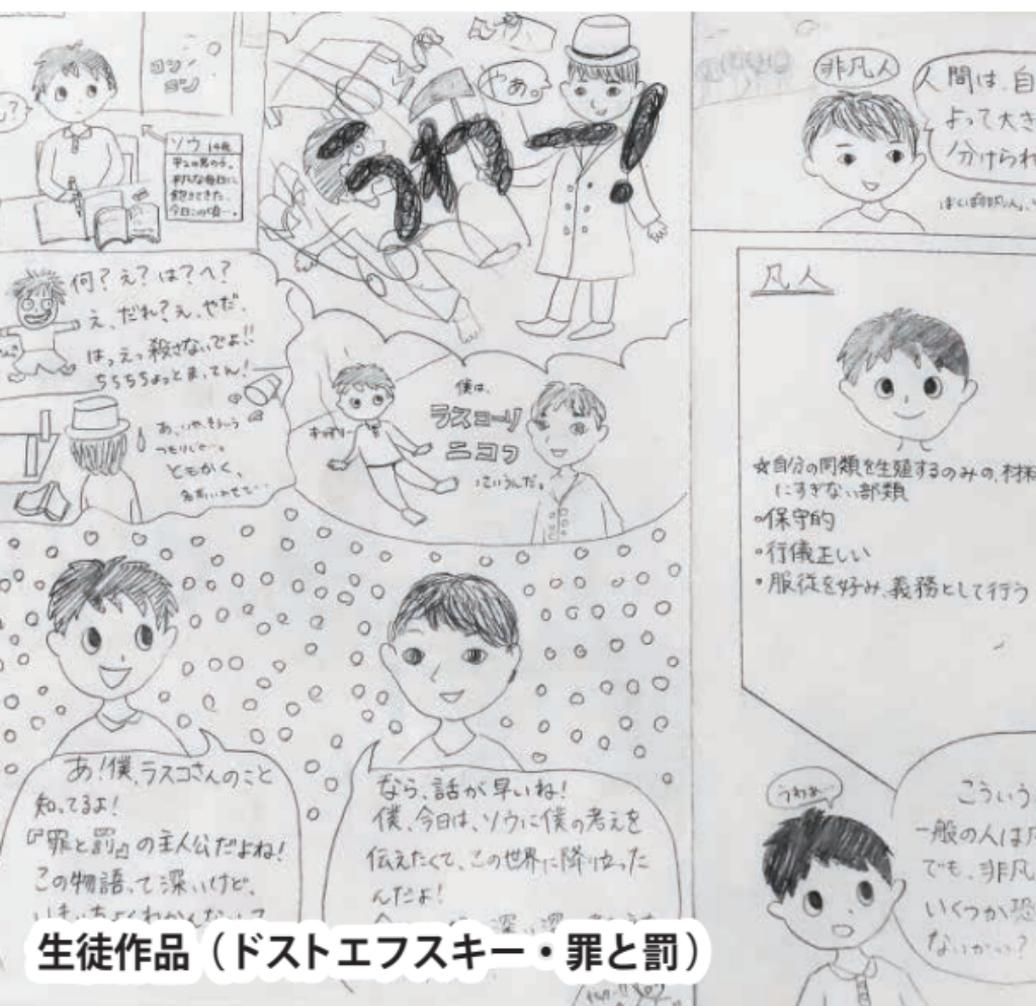
学びの楽しさがある

クセジユ国語の最大の魅力は何かといえは、実は「脱線」であると思います。先ほどの『ハーバード白熱教室』を読む授業でいえば、ここから話題はヨーロッパの哲学史や、科学の倫理へと広がっていきます。例えば、人間を超える人工知能は創るべきではないという論があります。ここには「人間を時代遅れな存在にしてはならない」という議論の他にも、人間と同等以上の人工知能には人権を認めるべきなのかという議論

も含まれているのです。もし人間と変わらない知性を持った人工知能が存在するならば、それを人間が一方的に使うのは奴隷制度と変わりがありません。それは果たして正しいのか、という問題も出てくる。

これは国語という教科を超えた、社会や理科にも踏み込む内容であるといえるでしょう。クセジユでは、そうした教科の枠を積極的に超えて考えます。このように「脱線」していくことで、様々な分野の知識はつながっていき、そして身近な問題として感じられるようになります。そして「新しいことを知る」という知的好奇心が

刺激されるのです。ときには文章の内容を理解するための「脱線」としてマンガを作成したり、文章をもとに建築模型を組み立てたりだったりします。このように全ての教科の中心となるものが、クセジユの国語科だといえるでしょう。



塾クセジユ
Que sais-je?
小学部・中学部・高校部